

教師の『感性教育』認識について

平嶋 一臣

Teacher's knowledge of "Education's Sensibility"

by

Kazuomi HIRASHIMA

はじめに

「感性」とは、一体何を意味するのだろうか。この疑問はかなり以前から持っていた。その疑問は今も続いている。そこで「感性」や「感性教育」が何を意味するのか強く確かめたいと思うようになった。

2008年度の学習指導要領（以下、「指導要領」）改訂でも示されているとおり、文科省もまた児童期の「感性教育」を重視している⁽¹⁾。私は、子どもに携わる仕事に就く者が、この国の教育界の流れを受けとめるとともに、子どもたちの教育に今何が大切なのかを考え、学校及びそれを取り巻く人びとと協働して取り組むべきであると考えている。

1 序論

前号の『純真紀要・54号』（以下、前号）では、感性および感性教育についての現状認識と具体的な実践の試みについて、以下の3点から考察を試みた。

その1つ目は、「感性」を文科省および研究者がどのように認識して、その重要性を提唱しているかであるが、「感性」についての確たる定義付けは、新指導要領中にも見いだせなかった。ただし、「感性教育」の場づくりについては、幼稚園教育の『教育指針』中に色濃く反映されていることから、この時期に大いに期待していることは予測できる。⁽²⁾しかし、小学校については教科により「感性教育」とのつながりに温度差があることも分かった。また、研究者間でも哲学・教育学・脳生理学・美学・心理学などそれぞれ専門の違いから、その定義を一本に絞るまでには至らなかった。

次に、2つ目の視点として小学校および幼稚園の管理職教師（以下、「管理職」）が、感性についてどのような認識を持ち学校や園の経営にあたっているのか、インタビューとアンケート調査から考察を行った。その結果、管理職は感性の豊かな教師について、①児童への気付きが鋭くきめ細やかで対応が素早い②学級経営能力が高い③聴く姿勢や思いやりの心を備えており、保護者との対応もスムーズ④時としてこだわりや思いこみが強く児童との意思疎通がうまくいかないこともある、と考えていることが見えてきた。その半面、感性が乏しい教師の姿として、①周囲の人の気持ちが感じとれない②客観視が出来ない③子どもの姿に気付かない、などの指摘がなされた。加えて、感性の乏しい教師への指導方

受理日：平成26年12月5日

純真短期大学こども学科 特任教授

法について尋ねたところ、①メタ認知の手法の必要性②（研修等で）たくさんの経験を積ませる③その教師のプラス面を評価し続ける、などの方法が挙げられた。また、管理職の考える児童への感性教育とは、①五感を通して感覚的認識を積むこと②可能な限り本物体験を積ませる③コミュニケーション能力を育てることで伸びる、と考えていることが分かった。

3つめの視点として、児童に直接指導にあたっている現場の教師達の「感性」についての考えである。指導要領が期待する「感性」「感性教育」を、教師達はどのように解釈し認識を持ち日々の授業に臨んでいるのか、これを探ることは極めて重要な意味を持つ。

それというのも、文科省・研究者・管理職が「感性」「感性教育」の重要性をいかに説こうとも、児童を直接あずかっている教師が、その意義を理解し、必要性を感じ、具体的な方法を重ねていかなければ、新指導要領も絵に描いた餅にすぎなくなるからだ。

教師が、「感性」「感性教育」についての考えを把握することは、文科省が「児童期に、もっと感性教育を」と提唱していることから鑑みても意義あることと考える。今回福岡市の教諭を中心に「感性」「感性教育」についてアンケート調査を行ったのは、以上の疑問について明らかにしたいと考えたからである。

以下のアンケート調査は、福岡市の教師（内 13 名は本学初等教育コース専攻学生）を対象に行ったものである。なお、今回のアンケートは配布数 393 枚、回収数 281 枚、回収率は 71.5%である。なお、調査期間は平成 25 年 10 月より 26 年 2 月である。

2 本論

ここでは、幼稚園および小学校教師（管理職を除く）および 11 名の短期大学生を対象に、「感性」「感性教育」についてのアンケート結果とその分析を行うことで、教師の「感性」「感性教育」への浸透と理解度を明らかにするとともに、それぞれの設問から新たに浮かんできた課題について考察を行う。

アンケートは、（１）の①～⑨までの 9 項目が「感性」について、（２）の⑩～⑱までの 9 項目が「感性教育」についての計 18 項目である。

（１）「感性」について

① 「感性が豊かな子」とは、どのような姿を想像しますか

教師間の会話には、しばしば「あの子は感性が豊かだね」「この子いい感性しているわね」と言った類の会話が交わされる。しかし、これらの会話は児童の具体的な姿を伝えてはいない。曖昧でありながらも、お互いに何となく納得したつもりで話を進めている。そのことを確かめてみたいと考え、この調査を行った。結果は次の通りである（3 択法のため、のべ回答者数 800 名。それぞれのカッコ内の数字は人数 以下の設問も同じ）

- 1 位 言葉が豊かで表現力が多彩な子・・・(183)
- 2 位 発想が独創的な子・・・・・・・・・・(179)
- 3 位 絵の色づかいに秀でた子・・・・・・・・(111)
- 4 位 周囲のことによく気付く子・・・・・・・・(98)

5 位 たくましさや優しさのある子・・・(67)

6 位 体験の多い子・・・(58)

7 位 音感の優れた子・聴覚の鋭い子・・・(49)

8 位 しっかりと考えて行動する子・・・(29)

9 位 理屈より行動が先の子・・・(11)

10 位 味覚の鋭い子・・・(10)

11 位 気持ちの移り変わりが大きい子・・・(3)

その他(2)・・・興味関心の強い子、何事にも感動する子

教師の考える、感性が豊かな子の姿には、「表現力が豊か」「発想が独創的」「図画工作での色づかいが優れている」「よく気付く」等の姿を中心にイメージしている。わずかな数ではあるが、教師の中には、11 位に見られる「情緒の安定していない子」を「感性の豊かさ」と結びつけていることも注視しておかなければならない。

② 親や教師は、「感性の豊かな子」を望みます。これはどんな理由からでしょうか

親も教師も、一般的に「感性の豊かな子」を望むと同時に、これらの子を賞賛する傾向にある。では、その賞賛は一体どこに起因するのであろうか。そこには親や教師が、子ども達への期待感を吐露しているようにも思える。その辺りの部分を、よりクリアに把握したいと考えた。アンケート結果は次の通りである（未回答者 10 名）

1 位 仕事の選択の幅が広い人生を送れそうだから・・・(72)

2 位 仕事の選択の幅が狭くても深い人生を送れそうだから・・・(68)

3 位 人間関係に失敗が無いと思うから・・・(56)

4 位 将来の仕事にプラスになるから・・・(35)

5 位 楽しく穏やかな人生が過ごせそうだから・・・(27)

6 位 もしかしたら芸術家を志すことになるかも知れない・・・(8)

その他・・・人権感覚を持っている子だから・・・(5)

「感性の豊かさ」を求めている陰には、その子の将来が潤いのある幸多き人生を、と願うややロマン的な期待を描いている傾向が窺える。また、僅かではあるが、感性の豊かさを「人権感覚」の有無と結びつけていることは注目すべきであろう。

③ 「感性が悪い」という言い方はあるのでしょうか

「感性が鋭い」「感性が鈍い」といった言葉をよく耳にする。また、それに近いニュアンスをもって「(あの子は) 感性が良い」とも言う。それならば、「感性が悪い」という言葉も有り得るのであろうか。それが無いのであれば、「感性」という語そのものに「良い」のニュアンスを内包していると考えているのであろうか。これについて確かめてみた。アンケート結果は次の通りである（未回答者 22 名）

・感性に「悪い」もある・・・(56) ・感性に「悪い」はない・・・(203)

この結果からは教師の多くが、「感性」という語に「良い」というプラス面が内包されると考えている。しかし、およそ 5 人に 1 人は「感性」が常に「良い」とつながるものではないと考えていることも見逃がせない。

④ 「感性」や「感性教育」という言葉を、どのような頻度で使いますか、聞きますか

この2つの語は、これまでもごく一般的に教育界では使われてきた。しかし、そのことを意識しながら子ども達と接してきたかと言えば、教師間によりかなりの温度差があるようだ。また、この語の使用頻度また聴く側の意識にも、教師間にバラツキがあるのではないかと考えた。

アンケート結果は次の通りである（未回答者7名）

- ・よく使うし、よく聞く・・・・・・・・・・（18）
- ・比較的によく使う、聞くことがある・・・・（87）
- ・あまり使わないし、聞かない・・・・・・・・（135）
- ・まったく使わないし、聞かない・・・・・・・・（34）

4項の設問中、上の2項の合計は105名で、全体の40%を下回る。教育現場の教師は、日々の実践の反省の中から、「感性」「感性教育」の語を意識的に採り上げ会話しているとした私の予想はかなり外れた。この2つの語は、未だ現場の教師達に十分には浸透していないようだ。

⑤ 自分の会話や文章の中で、どんな時に「感性」という言葉を使いますか

前問の④とも関連する。教師には「感性」を重視するタイプと、さほどそのことに拘泥しないタイプもいる。そこで、「感性」という語についての認識や理解はともかく、この語を使う場合に、一体どういう場面をイメージして使っているのかを尋ねた。アンケート結果は次の通りである（未回答者191名）

- ・「あの子の感性は豊かだね」・・・・・・・・・・（52）
- ・「あの子の感性はいいね」・・・・・・・・・・（16）
- ・「あの子は独特の（瑞々しい）感性を持っているね」・・・・（5）
- ・「子ども（時代）にもっと感性を育てたい」・・・・・・（4）
- ・「もっと感性を働かせて」・・・・・・・・・・（4）
- ・「あの子の感性は鋭いね」・・・・・・・・・・（4）
- ・「あの子は感性があるね」・・・・・・・・・・（2）
- ・「感性を揺さぶられたよ」・・・・・・・・・・（1）
- ・「それはあの子の感性によるものですよ」・・・・・・（1）
- ・「あの子の感性は大切にしたいね」・・・・・・・・・・（1）

「感性」の語には、「豊か」「良い」「個性」などと結びつく傾向が見られる。このことについては、設問③で見たように、「感性」をその子のプラス面の評価につなげて見ていることとも関連している。ただし、ここで191名の未回答者があったことは見逃せない。設問の意図が不明確だったのか、あるいはいざ問われると、「感性」と結びつく会話が思い出せなかった教師の実態も想像される。そこにはどんな理由や原因があったのかということについては今後の課題である。

⑥ そもそも「感性」とは何でしょうか

文科省が指導要領で重視している「感性」を、教師はどのように認識あるいは理解

しているのだろう。今回調査対象の教師に、極めてフランクに答えてもらおうと考えた。前号では、管理職が教師の感性をさまざまな具体的な姿で語ってくれたのだが、今回は、それを子どもを対象に、教師の視点で見つめてもらおうと考えた。アンケート結果は次の通りである（未回答者 51 名）

- ・外界の感じ方・・・・・・・・・・(64) ・心の豊かさ・柔らかさ・・・・・・・・(36)
- ・感覚・・・・・・・・・・・・・・・・(29) ・表現力・・・・・・・・・・・・(25)
- ・良さに気付く心・・・・・・・・・・(22) ・芸術的（美的）センス・・・・・・・・(21)
- ・感受性・・・・・・・・・・・・・・(17) ・独創性・・・・・・・・・・・・・・(9)
- ・判断力・・・・・・・・・・・・・・(4) ・ひらめき・・・・・・・・・・・・・・(3)

「感性」を、外に向けた感じ方・表現力・感覚・気付きと考える教師がいるとともに、心の豊かさ・芸術的センスのように、むしろ自己の内面の姿と考えていることが、ここからは窺える。「感性」の捉え方にも、教師にとってこのように両極端であることは興味深い。

⑦ 「感性」と聞くと、どんな関連語が浮かびますか

感性の定義づけが、研究者においてもまちまちであるだけに、確かな視点を持ち、それを目標に日々の授業にあたっていくことは一様ではなかろう。では一体、現場の教師達は何を規準に実践を続けていけばよいのだろうか。それを推量する一つの手段として、「感性」と聞いて、何をまたどんな場面を連想するのかについて把握したいと考えた。アンケート結果は次の通りである（3 択まで可 のべ回答者 763 名）

- I 類・・・スポーツ (17) 若さ (5) 武道 (0)
- II 類・・・芸術 (194) デザイン (75) 書道 (16)
- III 類・・・感覚 (175) 情操 (96) 感情 (79) 情緒 (74) 情動 (20) 衝動 (0)
- その他・・・感受性 (6)、表現、人権、道徳、個性、人間関係、色彩 (各 1)

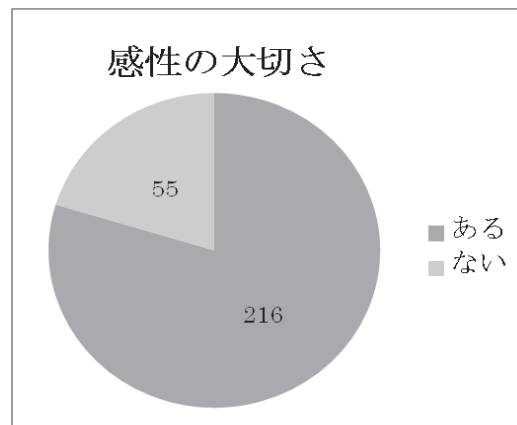
アンケートの結果を、便宜上「I・II・III 類」のような 3 つのグループと、「その他」の計 4 グループに分けた。I 類は運動部門及びその連想語、II 類は芸能部門、III 類は心理・生理学部門、その他は自由記述欄に書かれていたものである。したがって、その他に書かれている計 12 件も、結果的には I・II・III 類の中に含まれるものがある。

さて、「感性」という語から教師がどのような場面を想像・連想しているかということだが、大きく分けて芸能面と心理・生理学面との関連をイメージしながら使用していることが分かる。このことから、「感性」の語が、我々人間界の外・内面の行動や姿を多面的に、また幅広い世界を捉える言葉として使用される傾向にあることが分かる。

⑧ 日常の生活で、「感性」の大切さを感じる場面がありますか

ここでは、「感性」の必要性という原点に帰ってみた。はたして教師は子どもにとって、感性を大切なもの、つまり必要と考えているのだろうか。また、必要があればどのような場面で感じたのだろうか。必要性の有無と、そう感じた場面を自由記述で聞くことで、場面と「感性」とのつながりを客観視できるのではなかろうか。アンケ

ート結果は次の通りである（未回答者 10 名）



「大切感じる場面」について、結果は多い順に次のようになった（未回答者 135 名）

- ・ 図工の作品づくりの時（含・独創性）・・・・・・・・・・（42）
- ・ 子どもが友達への気配り、気遣いを見たとき（含・人間関係）・・・・（36）
- ・ 作文や作品鑑賞などの言葉選びで・・・・・・・・・・（32）
- ・ 音楽の時のリズム感や表現で・・・・・・・・・・（15）
- ・ 周囲の美しさや変化に気付く（気付かない）・・・・・・（8）
- ・ イメージの広がりや担任を超えている時・・・・・・・・（7）
- ・ 友だちの訴えに無表情な子を見たとき・・・・・・・・（2）
- ・ 家庭科の調理実習で、できあがりの盛りつけ方を見て・・・・・・・・（2）
- ・ 劇中の人物に成りきっている子を見たとき・・・・・・・・（1）
- ・ 算数で担任が予想していない考え方の解き方をしたとき・・・・・・・・（1）

80%に近い教師が、授業中における感性の大切さや必要性を感じている。この割合を単純に多いと見るか、それともむしろ 20%の教師が「感じていない」ことに注視すべきか異論のあるところであろう。

子どもの様子から、教師が「感性」の大切さを感じるものには、芸能教科、言語表現、友人との人間関係づくり、などの場面を考える傾向がある。

⑨ 「理性」「知性」「感性」、この中で特に大切と考えるものと、その理由

この 3 つの言葉は、教師間会話でよく並立して出てくる言葉である。教師がこれらの言葉を発している時に、これら 3 語のいずれに重点を置き、子どもへの授業やそれ以外の場面で接しているのだろう。敢えて「特に」という言葉をここで挿入しているのは、この 3 語の違いを、教師がしっかりと意識してアンケートに答えてもらいたいと考えただけで他意はない。アンケート結果は次の通りである（未回答者 7 名）

- ・ 3 つとも・・・・・・・・（219）
- ・ 知性・・・・・・・・（1）
- ・ 理性・・・・・・・・（26）
- ・ 感性・・・・・・・・（28）

そのように考える理由について尋ねた結果は次のようになった

○ 3 つとも同じように大切と考えた理由

この 3 つのバランスで日々の生活が成り立っているから・・・・（42）

どれが欠けても味気ないので (1)

○「知性」が大切と考えた理由

学力保障が何よりも優先するから (1)

○「理性」が大切と考えた理由

人に迷惑をかけないように、ルール守りが第一だから (6)

人間にはまず理性が求められる (2)

理性が、知性・感性を内包していると考えから (1)

状況判断の元になるものだから (1)

集団生活の根幹になるものだから (1)

三者のバランスを保つのも理性だと考えるから (1)

自ら学ぶことができないものだから (1)

○「感性」が大切と考えた理由

感性の基盤の上に知性・理性が積み重なっていくから (6)

感性は育て補うことが難しいので (2)

相手への思いやりが何よりも大切だから (1)

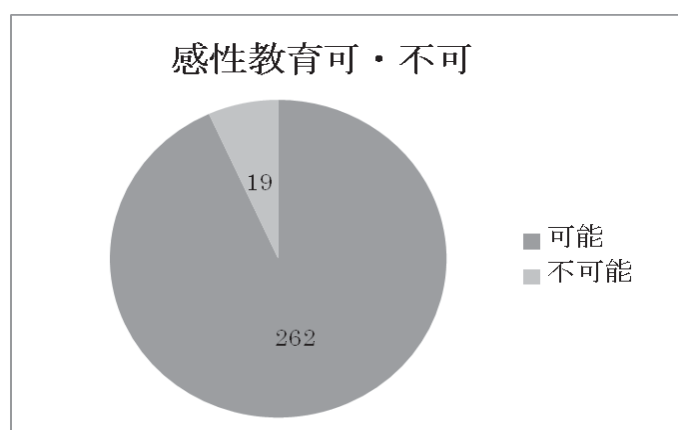
生きる力の源だから (1)

予想通り、この3者に優劣を付けることはできない、と考える教師が圧倒的多数であった。ただし、教師全体の1%程度は、「理性」もしくは「感性」が、子どもにとってもっとも大切と考えている。自由記述で、その大切さを尋ねると、「3つとも」「理性が特に」の理由としては、実際上の生活場面からと答えており、「感性が特に」の理由としては、人としての基盤だから、と考えている。

(2) 「感性教育」について

⑩ そもそも、「感性」を育てることは可能でしょうか

教師間には、一部分ではあるが感性の先天性論もあるようだ。しかし、これを全面的に肯定すれば、感性教育は不要、不可能論にもつながりかねない。では、そのように語る教師ははたして心底からそれを信じているのであろうか。そこで、「感性教育」の「可能」「不可能」について尋ねてみた。また、「可能」と考える場合の理由についても自由記述とした。アンケート結果は次の通りである（未回答者0名）



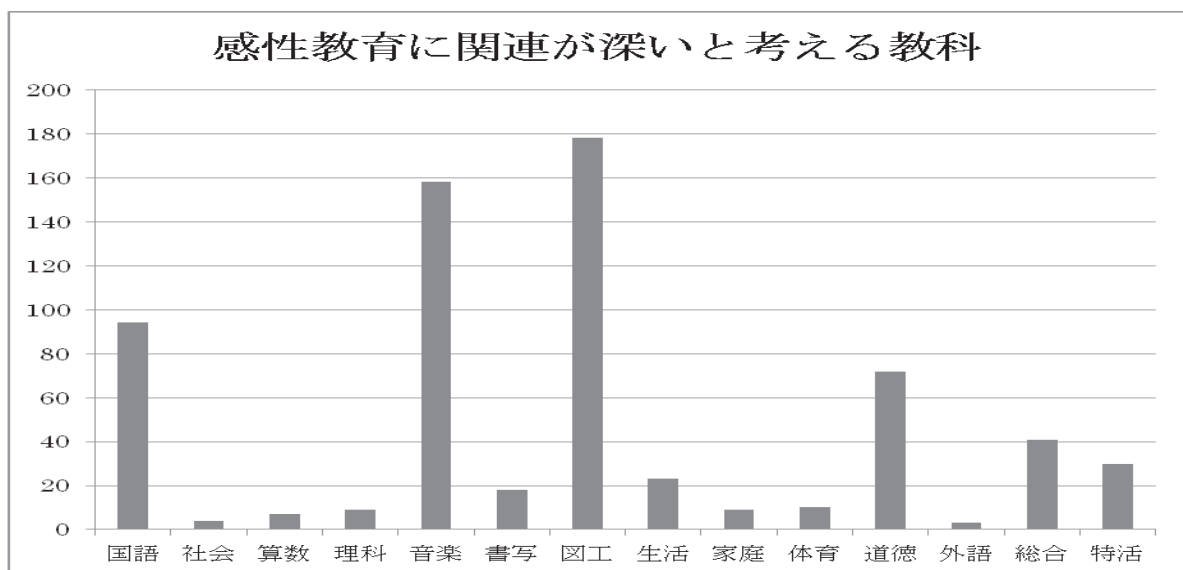
「可能」と考える理由（回答者 156 名）

- ・自分の体を通し様々な体験で・・・（74）
- ・周囲の人との関わりから・・・（42）
- ・自然などの環境から・・・（40）

およそ 93%の教師が、「感性教育は可能である」と考えている。その理由は、物的・人的な体験活動や環境から育つと考えている。しかし、およそ 7%の教師は「感性教育は不可能」と考えている。これは初めから何ら手立てを講じないのか、それとも手立ては講じたが結果的には育ったという実感がなかったからそう考えるに至ったのか。これについては、いずれ追求調査が必要である。

⑪「感性教育」と聞いて、どの教科の学習場面を想像しますか

文科省は、「音楽」「図画工作」に感性教育の多くを期待していることが、指導要領中からも窺える。では現場教師もまた同じような認識に立ち、日々授業実践に取り組んでいるのだろうか。もしかすると、文科省の期待する教科と現場教師の意識する教科との間にズレがあるのではなかろうかと考えた。アンケート結果は次の通りである（自由選択法 回答者 715 名）



その他

- | | |
|-------------------|--------------------|
| ・学校行事・自然教室・・・（13） | ・学校行事・芸術鑑賞会・・・（11） |
| ・クラブ・委員会活動・・・（11） | ・清掃・手伝い・・・（9） |
| ・全ての教科・・・（8） | ・休み時間・・・（4） |
| ・プロによる出前授業・・・（4） | ・地域行事参加・・・（2） |
| ・給食時間・・・（1） | |

（※結果的には自由選択としたので「教科」ではなく「教科等」となった）

教師の多くが、文科省が考えるように、感性教育の場を「図画工作」「音楽」を意識して授業に臨んでいることが分かる。しかし、それに加えて「国語」「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」にも感性教育の場を意識していることも見逃せない。こ

れは、教師の実体験からくるものであろう。この部分については、今後の教育に「感性」を重視している文科省としても見過ごせない部分ではあるまいか。

⑫ 「感性教育」は何歳まで十分に可能だと考えますか

抽象思考の芽生えが、9歳あるいは10歳頃からとも言われる。その点を納得するとすれば、「感性教育」はそれ以前の段階で、と考えられる。学者や研究者の立場とは別に、教師は、これまでの実践の積み上げから、この設問について感覚的にそれを掴んでいると考えた。アンケート結果は次の通りである（未回答者0名）

- ・ 幼児期まで・・・・・・・・・・(14) ・ 小学校2年生ぐらいまで・・・・・・・・(12)
- ・ 小学校4年生ぐらいまで・・・・・・・・(27) ・ 小学校6年生ぐらいまで・・・・・・・・(32)
- ・ 中学校まで・・・・・・・・・・(29) ・ 高校生まで・・・・・・・・・・(9)
- ・ 大学生(22歳)ぐらいまで・・・・・・・・(10) ・ 30歳ぐらいまで・・・・・・・・(1)
- ・ 年齢には関係ない・・・・・・・・(127) ・ その他(1)・・・人により異なる(1)

※小学校の総計・・・(71)

「年齢に関係なく」感性教育は可能だと考える教師がかなり多い。それに「小学校の時期まで」「中学校の時期まで」「幼児期まで」が続く。「年齢に関係なく」感性教育は可能と考えているのは、期待も含めてということが有るかもしれないが、これについては今回の調査では分からない。この127名は、「幼児期まで」から「中学校まで」を一括りとした場合の総数114名とほぼ同数となる。つまり、感性教育は「年齢に関係ない」と「中学校以前でない」という考えに大きく二極化している。

⑬ 「感性教育」の成果が著しいであろうと考える年齢

前問⑫との関連である。ここでは前問の「十分に可能」を「著しく伸びる」に置き換えた。教師が子どもの感性を育てる時期として、どの辺りの年齢を注目しているかということを探ねた。アンケート結果は次の通りである（未回答12名）

- ・ 幼児期まで・・・・・・・・・・(69) ・ 小学校2年生ぐらいまで・・・・・・・・(23)
- ・ 小学校4年生ぐらいまで・・・・・・・・(50) ・ 小学校6年生ぐらいまで・・・・・・・・(31)
- ・ 中学校まで・・・・・・・・・・(23) ・ 高校生まで・・・・・・・・・・(14)
- ・ 大学生(22歳)ぐらいまで・・・・・・・・(8) ・ 30歳ぐらいまで・・・・・・・・(3)
- ・ 年齢には関係ない・・・・・・・・(28) ・ その他・・・・・・・・人により異なる(1)

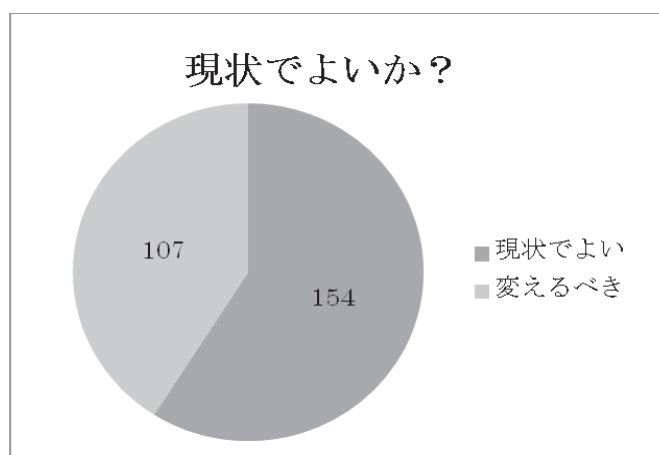
※小学校の総計・・・(104)

「著しく」を設問に挿入すると、かなりの教師が前問からの移動している。感性の「著しい」成長を小学校まで（含・幼児期）と考えている教師が、その66%を占め、「感性教育は小学校までに」、という教師の声が聞こえてくるようだ。

⑭ 「感性教育」・「感性を大切にする教育（指導）」の現状をどう考えますか

とにかく学校現場の教師は忙しい。授業と校務分掌に専念できたのは昔の話である。多忙すぎる教師に、新に「感性教育」も学校（教師）に、という文科省の強く熱い願いを、教師は率直にどう考えているのだろうか。その辺りについて本音を尋ねてみる

ことにした。アンケート結果は次の通りである



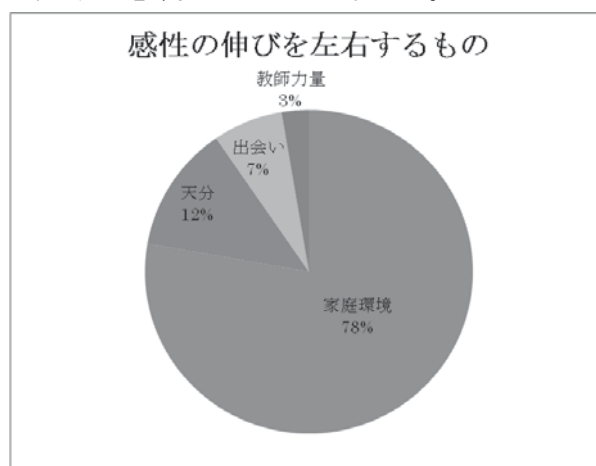
「変えるべき」と答えた人の理由（回答者 78 名）

- ・カリキュラムの柔軟性・プロの出前授業など、授業の中身を再考する・・・(24)
- ・自然体験などの機会を増やす・・・・・・・・・・・・・・・・・・(19)
- ・教師の授業方法を再考する・・・・・・・・・・・・・・・・・・(15)
- ・学校・授業にゆとりをもたせる・・・・・・・・・・・・・・・・・・(7)
- ・学校・社会の環境作りを急ぐ（含・教育委員会の改革）・・・・・・(5)
- ・道德教育の充実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(4)
- ・もっと家庭に委ねるべき・・・・・・・・・・・・・・・・・・(4)

60%に近い教師が現状のままを望んでいる。それと同時に、40%の教師が何らかの理由で「感性教育」の現状に意見を持っている。現状を望んでいる教師にとっては、「十分だ」もあれば「十分とは思わないが（多忙感もあり）今のままで良い」と考えているのかもしれない。また、「変えるべき」の考えについては、その理由から、総じて「ゆとりのある教育」への再考を願っていることが窺える。

⑮ 子どもの「感性の伸び」は、何に最も左右されと考えますか

設問⑩との関連である。「感性の伸び」と教師との出会いはどのように影響があると考えているか尋ねた。「感性教育」を「学校を中心に・・・」と捉えるのであれば、このことについての客観的な認識は意義あることと考える。アンケート結果は次の通りである。



教師の考える子どもにとっての「感性教育」の場は、第一に「家庭環境」にあることが分かる。反対に「教師の力量」によると考えるのは、わずか 3%であった。教師の謙遜姿勢を割り引いても低い数値である。この中の「出会い」を、「教師との出会い」と考えても、合わせて 10%にすぎない。これでは、文科省がいくら「学校教育で子どもの感性を育ててほしい」と謳っても、「笛吹けど踊らず」「今なお道遠し」の観が深い。

⑩ 「感性教育」について、日頃考えていることは

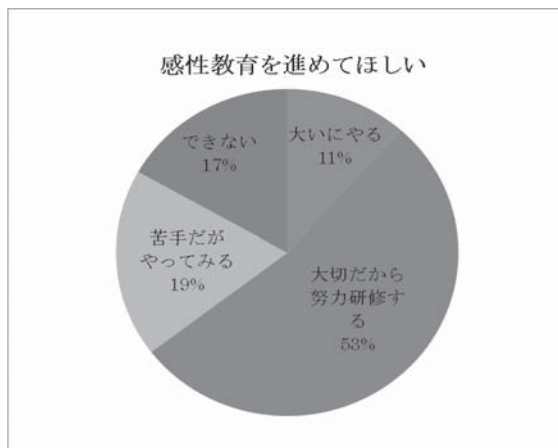
「感性教育」について、暗中模索の現状を、教師はどのように受けとめているのだろうか。ここでは、「感性」「感性教育」全般について、教師の忌憚のない考えを尋ねてみた。アンケート結果は次の通りである（回答者 29 名）

- ・子どもに教育する前に大人（親・教師）こそ感性を磨いておく・・・・・・・・・・（8）
- ・子ども時代から色々なタイプの人と出会わせたい・・・・・・・・・・（6）
- ・子ども時代にもっと勤労生産的な経験をさせる・・・・・・・・・・（4）
- ・最近は、「人・もの・事」との出会いが少なくなり知的教育を重視しがち・・・・（3）
- ・授業の中で、もっと表現活動の場を増やすこと・・・・・・・・・・（2）
- ・生来感性のない子にこの教育ができるのか疑問だ・・・・・・・・・・（1）
- ・今の時代、数値で評価できない「感性」を大切にしない風潮がある・・・・・・・・（1）
- ・「生命（いのち）」を尊ぶ教育を、もっと増やすべきだ・・・・・・・・・・（1）
- ・幼稚園教育をもっと重視すべきだ・・・・・・・・・・（1）
- ・先生方は、もっと子どもを褒める授業を心がけてほしい・・・・・・・・・・（1）
- ・親や先生方は、子どもに偏った情報提供をしないでほしい・・・・・・・・・・（1）

ここまでのアンケートで言い尽くしたのか、回答者はわずか 29 名であった。しかし、これらの意見には、傾聴に値するものが少なくない。「子どもに感性を期待する前に大人こそ・・・」「出会いや体験活動こそが・・・」という部分に、教師の「感性」「感性教育」に対する熱い願いが聞こえてくる。

⑪ 「感性教育をもっと推し進めてほしい」と言われたら、あなたはどのようにしますか

管理職の中には、感性不足教師に学級経営を任せることに不安を持っていることについては、既に前号で述べた。「感性教育」への期待を受けとめ学校現場で実践していかなければならない教師は、どう考えるであろうか尋ねた。アンケート結果は次の通りである（未回答者 7 名）



設問⑮で見たように、教師は「感性教育は家庭環境が育てるもの」と、その多くが考えているものの、「いざ学校で」、と期待されれば、80%を超える教師が、その努力を惜しまない姿勢が窺える。ここに今後の「感性教育」への期待・希望が見えてくる。

⑮ あなたの「趣味」「特技」に費やす時間は

この設問は、まったくの私見から出ている。これまで、私の教育現場での経験から、「感性」を重視し「感性教育」を意識し実践するタイプの教師には、学校外にも自らが楽しむ時間をたっぷりと持っている傾向が見られたからだ。いわば個人的な趣味の時間の多さと、子どもへの「感性教育」志向とは相関があるのではなかろうかと考えた。アンケート結果は次の通りである（未回答者 13 名）

- ・ 多い（ほとんど連日、または 1 回に長時間）・・・・・・・・・・（6）
- ・ 普通（週に 2 ～ 3 回ほど、または 1 回にやや長時間）・・・・・・・・（65）
- ・ 少ない（週に 1 回ほど、または短時間）・・・・・・・・・・（177）
- ・ ない（趣味は持たない）・・・・・・・・・・（20）

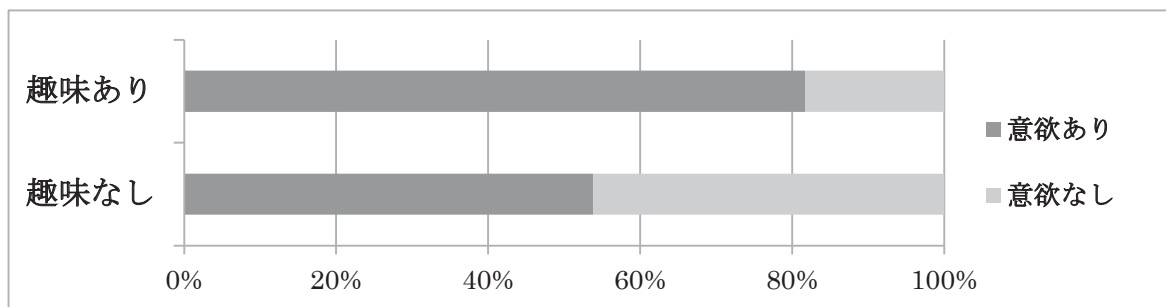
◎設問 17・18 から「感性教育への意欲」と「趣味特技あり」との相関

○趣味の多い人・ある人 計 71 名

その中で感性教育への意欲あり（58）：意欲なし（13）

○趣味の少ない人・ない人 計 197 名

その中で感性教育への意欲あり（106）：意欲なし（91）



教師のおよそ 74%が「趣味に費やす時間は少ない」もしくは「趣味はない」と答えて

いる。あるいはここにも、昨今言われているような教師の多忙さが影を落としているのかもしれない。

さて、上に示しているグラフである。これは趣味のある（多い）教師と趣味のない（少ない）教師の、感性教育に向ける意欲を表している。このことから、趣味のある教師のおよそ82%が、「感性教育への意欲が有る」と答えている。それに比べ、趣味のない（少ない）教師はおよそ54%程度と、その意欲は低い。このことから、趣味・特技の多少と感性教育への意欲との間には相関がみられるのでは、と想像したくなる。

3 結論

①教師の考える『感性』について

- 教師は、「感性」を、感じる力、気付き、表現力それに心の在り方を指していると考える傾向がある。また、この「感性」が豊かであれば人間関係はスムーズに運び、必然的に豊かな人生を送れるのではないかと考えている。とは言え、改めて「感性」の語について使用頻度を尋ねると、多用している傾向は見られない。
- 一口に「感性」といっても、教師のイメージする世界は幅が広く、芸術的センスから情緒的な世界までを思い浮かべていることが分かる。それと同時にスポーツ、道德、人権と言ったジャンルにまで影響や関連があると考えてもいる。したがって、教師や学校現場を対象に、「感性」を一面的なイメージで捉えることは、案外的外れになることも理解しておくべきである。
- 教師にとって、「子どもの感性」を感じる場は、授業中の作品の出来映え、行動、発言等に集中している。また、そこから「感性」の大切さを教師側が学んでいるとも言える。それと同時に、「感性」「知性」「理性」を等しく重要視したい傾向にあることも分かる。

②教師の考える『感性教育』について

- 「感性教育」は、学校や教師の力で可能と考えているものの、その方法としては、体験活動や周囲の人々との交流に期待する傾向が強く、特定の教科を教室の学習で行えば育つわけではないと考えている。
- 教師にとって、「感性教育」の場は芸能教科や国語にそのウエイトが大きいと理解しつつ、その他の学校内の諸活動のほぼ全域に亘り、その場が有ることも視野に入れている。
- 教師は、「感性教育」の時期は年齢に関係ないと考えているものの、著しい伸びは小学校時代と考えている。したがって、この時期における「感性教育」の充実を願っているが、そこに至るための「ゆとり」が無い現状を憂えている。
- 教師は、「感性教育」が将来その子の人間的基盤になる重要な位置を占めるものと考えている。しかし、その役割は学校より家庭にあると考える傾向が強いことも分かってきた。また、感性を育てるには、指導する側の感性の豊かさ、および子ども自身の体験・経験こそ不可欠と考えている。
- 今後の「感性教育」の促進については、努力を惜しまない。その指導方法についても

努力研鑽するといった前向きの姿勢が見えている。

○趣味の多い教師には、「感性教育」への意欲が高い傾向が見られる。そのためにも教師には学校以外の場で多方面の趣味や特技に専念する時間と場を提供したいものだ。文科省はじめ各地方の教育委員会の大局的な判断を仰ぎたい。それはまた、アンケート中の設問⑩に見られた、「子どもに感性を望む前に教師自ら感性育てを」の意見ともリンクする。

おわりに

「感性」「感性教育」、この二つの言葉が案外教育の原点あるいは核と言えるのでは、と考え始め、すでに10年余が過ぎた。今回の調査研究も、かつてお世話になった小中学校教育現場にどのような方法で返すことができるのかを模索しているにすぎない。模索はすれど、未だ具体的な解決方法は見いだせないでいる。

今回、現場教師の「感性」「感性教育」に対する意識調査と現状確認を基に、今後は、「感性教育」の具体的な方法について論を進めて行きたい。もちろん、「感性教育は不得意で、私にはできない」と回答した教師にも届くような方法でなければならないと考える。

註

(1) 純真紀要 No54 2013 p60 参照

(2) 純真紀要 No54 2013 p59 参照

参考文献・図書

- 安部富士男『感性を育てる保育』国土社、1999年
- 石井義武『勉強の仕方の研究』岩波ブックセンター信山社、1985年
- 梅澤啓一『感性と造形表現～その発達のメカニズム～』晃洋書房、2003年
- 遠藤友麗『感知融合のすすめ』教育と医学 第53巻11号、巻頭随筆、2005年
- 片岡徳雄『子どもの感性を育む』NHKブックス603、1990年
- 桑子敏雄『感性の哲学』NHKブックス914、2001年
- 倉戸ツギオ『体験学習と感性教育』明治図書出版、2001年
- 小阪裕司『「感性」のマーケティング』PHPビジネス新書017、2006年
- 坂口光一リベラルアーツ講座『感性・こころ』亜紀書房、2008年
- 佐々木健一中公新書2072、2010年
- 田口瑞穂・藤田静作『子どもの感性を呼び覚ます科学教育』科教研報Vol.25
- 都甲潔『感性の起源』中公新書1772、2004年
- 樋口 聡『新しい感性教育論』中国、華東師範大学での講演 2007年5月11日
- 福島哲史『感性がもっと鋭くなる本』三笠書房、1999年
- 堀井令以知『感性の言語学』近代文藝社、1996年
- 増山英太郎『感性はどうしたら磨けるか』ごま書房S-126 1989年
- 山岸美穂・山岸健共著『感性と人間』三和書籍、2006年
- 朝日新聞社科学部編『心のプリズム』朝日新聞社、1977年